

動物はいつか死ぬ。そのことは知っていたはずだった。死というものがこんなに身近なのだということを、冷たくなり固くなったキーちゃんが無言で私にうたえた。

キーちゃん、シーリン、白ちゃん、マルちゃんと初めて出会ったのは2年生の5月だった。シーリンをだき、温かい鼓動を聴診器で聞いて、一生懸命お世話しようと、私は心から思った。みんなもきっとそうだったと思う。しかし、私を含めてこのことが「お世話をしたい」という気持ちの内訳としては、「かわいから、さわりたいから」という興味が80%ぐらいをしめていたに違いないと思うのだ。当然、次第にシーリンへの興味がうすれてゆき、11月には週末のお世話はグループ内の2、3人の持ち回りとなった。

そのことで、Cグループはみんなと話し合いをしたし、けんかもした。文句も言った。シーリンのことは大好きだし、お世話だっていやではなかった。でも、そのころの私も「世話を押しつけられて」という不満の中で、シーリンのお世話をきくと義務感からやっていたはずなのだ。シーリンの気持ちを考えてあげる余裕すらなかったのである。

その後、話し合いが実を結んで、週末のお持ち帰りはスムーズにいくようになった。虫のお持ち帰り重なった人が、別の人にシーリンのお持ち帰りを頼み、でも、代わってくれた人への感謝の気持ちから、バス停まで送っていくという光景を私は見た。気持ちよく代わってあげた人もえらいし、バス停までわざわざ遠回りをした人もえらい。みんながシーリンのことをちゃんと考えてくれているのがわかって、なんだか胸が熱くなり涙が出た。

動物のお世話は義務感ではつとまらない。義務感の中でのお世話はつらいし、さびしい。愛情を持ってこそのお世話が本当のはずである。責任の押し付け合いの時期もあった。こんな私たちをシーリンはどんな気持ちでながめていたのだろう。何か言いたくても伝えられないシーリンの心を思いはかろうとするやさしい気持ち。話し合いをすることで問題を解決していくことの喜び。これがシーリンとCグループの仲間がくれた「宝物」である。

このように集団で小動物を飼育することで、事前に想定していないことも学ぶことができた。

最初は、小動物と子どもという二者間の成長しか想定していなかった。この成長は勿論見られたが、それ以上に、小集団で飼育することで子ども同士や家庭も巻き込んだ新たな生活様式の創出が

必要となったのである。

集団での飼育は、一人の子どもが世話のすべてを背負う必要はなく、自分ができる役割を果たすことで良い。そして、その役割も日々さまざまな状況が変化する中で、不都合を生じた子どもを都合がよい子どもがサポートする。そして、サポートしてもらった子どもは別の仕事を後で分担するという、臨機応変な対応を生むのである。このような大事な能力が育つ状況が生まれることは、たいへん価値があると思う。

ところが、同じ状況に子どもがいても、教師や親が機械的に持ち帰りの順番を決めたり、飼育の順番をマニュアル化したりして、トラブルを回避するという考えであれば、臨機応変な対応は子どもには生まれず、指示に従うだけの子どもか、マニュアル通りにしか動けない子どもになるだろう。そして、結果的に“未知のトラブルに対応できない子ども”になるのではないかと考えるのである。

このトラブル処理の能力も、飼育活動を通して学ぶことができる大切な能力だと言っても良いのではないだろうか。

#### 4 「持ち帰りの制度」が発展した「育てる会」の発足

##### ◆「学校で飼えば」は通用しない

クラス替えが近づいてきた。飼っていたモルモットをどうするか話し合いを持った。

最初は、「新しいクラスで飼えばよい」「先生が飼えばよい」「学校の飼育小屋へ入れればよい」などと、気軽に考えていた。

そのような子供たちに、私は次のように反論した。

「新しい学級へ分けるとすると、どのモルモットを持っていくつもりなの」つまり、子どもは新しい学級へ自分が行くから、当然、自分が2年間育ててきたモルモットを持っていけると思っていた。しかし、同じモルモットを育てた子供たちが同じ学級になるとは限らない。他のモルモットを育てていた子どもは、自分のモルモットを引き取りたいと言いつくだろう。さらに、新しい学級の先生が了解してくれるのかも決まっていない。様々な問題が出てきたのである。

「先生が飼う」という方法には、「きみたちは、まったくモルモットを飼ったことがない人に、自分のモルモットを預けられるの？そして、その人たちが上手に世話ができなくても我慢できるの？」と問い返した。新しい森田学級の子どもは、飼育を体験していない子どもの集まりである。その子供たちが、未熟な扱い方をすればけがや問題が発生することは容易に想像できる。それに対し

て口出しも手出しもできない。それで良いのかと尋ねたのである。すると、「それは我慢できない」という。2年間大切に育ててきたモルモットを乱暴に扱われることは我慢できないのである。

「学校の飼育小屋に入れる」という意見には、「学校って、誰のこと？ 学校で育てるとするのは、誰が育てると考えているの？」と問い返した。

すると、子どもは「校長先生」「飼育委員会」などと言う。そこで「休みに日はどうなるの？」とさらに質問した。学校のものになったモルモットを、飼育委員でもない新4年生が持って帰るのはおかしい。また、順番も決められない。

#### ◆「みんな」なら、本当にできるの？

このように、子どもの出した案はすべて否定された。では、どうするか。本気で考え始めた。すると、数人が自宅で引き取れるかどうか家に聞いて来ることになった。その中から、2匹が引き取られることが決定した。

そして、1匹は直前で死に、1匹が残った。このグループは、「みんなで飼うならいいよ」という意見だった。

でも、その中には無責任さが隠れているような気がしたので、そのグループの子供たちに「家に帰って、飼っても良いというのは僕の家だけだったら、どうする」と聞き直すように指示した。つまり、たった1軒になってもモルモットを引き取るつもりがあるのかを確かめさせたのである。すると、5人以上いた「了解」した家が、すべて断りに来た。結局、1匹のモルモットのもらい手が決まらなかった。

そこで、私は「仕方ないから、保健所へ引き取ってもらおう」と提案した。子どもは「保健所に行くとうなるの」と質問するので、「安楽死だよ」と答えた。子どもはびっくりした。「それはいやだ」といいます。その子どもに「仕方ないだろう。だれも引き取ってくれないのだから」と厳しく言った。

子供たちは、このままだとモルモットが殺されてしまうというので、必死になって家の人を説得し始めた。

#### ◆「育てる会」の発足

その結果、3人の家庭が「自分の家で引き取って良い」と申し出てくれた。

つまり、自分1人で責任を背負って育ててくれるという家庭が4軒でたのである。きっと子供たちが必死になって親を説得したのであろう。

そして、立候補してくれたその3人で相談し「モルモットを育てる会」というものを設立した。

その話を聞いた1人の子も加わって、2週間交代で4人の家庭を巡回するシステムを作り上げたのである。

このシステムは、モルモットが死ぬまで2年以上継続した。

#### ◆「育てる会」の完結

「モルモットを育てる会」で飼育していたモルモットが死んだ。通算5年間、子供たちに大切に育ててもらった結果の大往生であった。

私の手を離れて、4家族で自主的に継続してくれたモルモットの飼育が、一応完結した。

5年間の飼育活動は、親の目にどのように映ったのか、そして、育てる会の活動を通して、どのような変化があったのか、率直な感想を会のメンバーであるU子の母親に書いていただいた。

教室においてグループで飼っていた2年間、シーリンをめぐっては、いろいろなことがあり、良い意味でも悪い意味でもうちの娘は特別な存在になっていたように思います。

「シーリンを育てる会」にしてもお世話をしたい気持ち3割、あとの残りはおそらく義務感と意地であったと思います。決して崇高な動物愛からお引き受けしたのではありません。

ただ4人で飼うことになった時、これで無責任な仲間に腹を立てる必要がなくなったという開放感もあって、シーリンへの愛情がそこで大きく増えたという気がしています。

2ヶ月に1回、シーリンは我が家にやってきては、得意のおねだり攻撃で野菜を食べては我が家に微笑みの種をまいていってくれました。そして、次の方にお回しする時には、親の私はまるで自分の子供を移動教室にでも送り出すような気分にならなくなったものです。

4月の下旬、無事に送り出したシーリンでしたが、Sさんが旅行に出かけるということで、急遽、シーリンがもどってきました。「6月まで寂しいね」と言っていた矢先のこの偶然は、今にして思えば神様のお計らいだったのかもしれない。うちに戻ってシーリンはいつものように愛嬌をふりまき、しかし、その2日後、突然逝ってしまいました。我が家に戻ったのは、まるで「死ぬ」為だったとしか思えないような急逝でした。

一事は、ダイエットをしなければならぬほどの立派な体格だったシーリンでしたが、徐々に体重は減ってゆき、2ヶ月の移動教室から戻ってくるたびに1回りも2回りも小さくなっていくのは、見ていて痛々しいほどで

した。

シーリンを育てる会が発足した時、たぶん誰しもが思ったことは「我が家では死んで欲しくない」ということだったろうと思います。ですが、体重の減りがプラトーに達し、シーリンの死がそう遠い未来の話ではないと思い始めた時、私は自分の気持ちが変わってきていることに気づきました。「シーリンを看取りたい」「死ぬのなら我が家で」そんな思いがふつふつと沸き出してきました。そんな私の気持ちに伝えるように、シーリンは我が家で死を迎えました。

シーリンの死を他の3家庭に知らせ、電話口で親同士涙を流しました。その時、私は、ふと娘の学校文集の文章を思い出しました。娘は「シーリンが結んでくれている仲間との絆」という言葉を使っていたのですが、この絆は、子供同士のみならず、親の間にも存在していたことに驚きを隠せませんでした。シーリンは死んでなお、親の心の中にまで、温かいものを授けてくれたのでした。

シーリンの飼育を続けてきた中で、娘がどのように成長したか、どのような教育効果があったのか、そのようなことはわかりません。なぜなら、シーリンは子供の教育玩具ではなく、4家庭に引き取られた時点で、そのような見返りを求めない、ただの「愛おしく思う存在」だったからです。死を体験させた生命の尊さがどうのこうのという、そんな不遜な冷めた目でシーリンの死を見つめることは、私にはできません。

強いて言うならば、娘は、シーリンをかわいがることで「優しい気持ち」を心に宿すことができ、シーリンの死を痛ましく悲しく思うことで「愛情」というものを推測し得たのではないか。そんなふうに考えております。

娘が文集に書いていた「シーリンからもらった宝物」が、これからの娘の人生にどのような影響を及ぼすのかはわかりませんが、「愛おしく思える気持ち」を持てる喜びを、シーリンからもらったのだということを、いつかそっと思い出して欲しいと思っています。U子の母絆」という言葉を使っていたのですが、この絆は、子供同士のみならず、親の間にも存在していたことに驚きを隠せませんでした。シーリンは死んでなお、親の心の中にまで、温かいものを授けてくれたのでした。

シーリンの飼育を続けてきた中で、娘がどのように成長したか、どのような教育効果があったのか、そのようなことはわかりません。

なぜなら、シーリンは子供の教育玩具ではなく、4家庭に引き取られた時点で、そのような見返りを求めない、ただの「愛おしく思う存在」だったからです。死を体験させた生命の尊さがどうのこうのという、そんな不遜な冷めた目でシーリンの死を見つめることは、私にはできません。

強いて言うならば、娘は、シーリンをかわいがることで「優しい気持ち」を心に宿すことができ、シーリンの死を痛ましく悲しく思うことで「愛情」というものを推測し得たのではないか。そんなふうに考えております。

娘が文集に書いていた「シーリンからもらった宝物」が、これからの娘の人生にどのような影響を及ぼすのかはわかりませんが、「愛おしく思える気持ち」を持てる喜びを、シーリンからもらったのだということを、いつかそっと思い出して欲しいと思っています。U子の母

これだけたくさんの財産をくれたシーリンに、私は心から「ありがとう」と言いたい。

そして、シーリンもきっと子供たち、それを支えた家族の人たちに「育ててくれてありがとう」と言ってくれるのではないかと思う。

可愛いと思う心、優しくする心を引き出してくれた動物との触れあいを、今後も継続していきたいと思う。

### Ⅲ 教室飼育を継続するための課題とその対応

#### 1 獣医師との連携について

- ・ 飼育の意義
- ・ 治療
- ・ 相談
- ・ 死への対応

#### 2 費用の問題

- ・ 備品購入の費用
- ・ えさ代
- ・ 治療費

#### 3 ホームステイ方式における保護者の理解

- ・ 順番の決め方（休日・長期休暇）
- ・ 備品の工夫
- ・ トラブルへの対応（病気・登下校中）

#### 4 飼育継続の問題

- ・ 学級の解体、担任の異動
- ・ 最後まで責任を持って飼育するかどうか
- ・ アレルギー、動物嫌いへの対応
- ・ 基本的には希望制で参加するが、趣旨を理解してもらおう努力

(筑波大学附属小学校教諭)